4月6日（月曜日）「埋葬と復活の間」

【新改訳 2017】

ルカ23•50－56、マタイ27•62－66

「ピラトは『番兵を出してやるから、行ってできるだけの番をさせるがよい』と彼らに言った。そこで、彼らは行って、石に封印をし、番兵が墓の番をした。」（マタイ27•65、66）

受難週第七日目のことです。神秘的な一日でした。前日には主イエスの痛ましい十字架刑が執行され、敬虔な議員の一人であるアリマタヤのヨセフが主のからだを墓に埋葬しました。弟子たちは散らばり、同行していた婦人たちは悲しみの内に遠くから見ているという状況の中でなされました。

この日は安息日にあたり、皆は休みました。祭司長たちは、ピラトを促して、墓の番を強化させました。彼らは、メシヤ（救い主）を「人をだます男」と言い、「よみがえった」と言わせないように、墓に封印までしたのです。しかし、そんな地上的状況とは無関係に、主のみこころは進められていました。死に拘束されない主は、陰府においてもみことばを宣べられたのです（Ⅰペテロ3•19参照）。

～祈り～

主よ。地上では何事もなかったかのように思われた日にも、すでに死に勝利して陰府に下られ、宣教しておられたことを覚え、御名を賛美します。

（学びのために）「使徒信条」、Ⅰペテロ 3 章 19 節参照。